

## 交流協会での三年間を振り返って

交流協会総務部 宮崎菜津子

私事ながら、このたび交流協会を離れることになりました。何度か書かせていただいたこのコーナーもこれで最後ということで、折角の機会ですので、これまでを振り返ってみたいと思います。

交流協会における勤務を通じて最も印象に残ったのは、やはり何といても台湾と日本の絆の深さでしょうか。

たとえばあまり知られていませんが、交流協会ではだいたい年間100件ほど、台湾で見つかった日本人の落し物や忘れ物を持ち主に返還しています。海外で失くした持ち物が戻ってくるだけでも奇跡的なのに、なんとその半数はお財布で、中身もそのままということがほとんどです。

また、戦前に台湾で生まれ育った父母や祖父母が当時暮らしていた場所を訪れたいという問い合わせがあれば、地図や資料を調べてお伝えするのも業務の一環として行っています。

台湾で失くした物が届けられ、持ち主から拾い主へのお礼の手紙を目にするたび、あるいは肉親の故郷を探索できたというお礼のメッセージを受け取るたび、両者の親愛の情に感動し、心温まったものでした。

そして何より、311の震災をはじめ、双方で災害や大きな事件事故が起こるごとに寄せられる応援メッセージや義捐金の申し出に、海を越えた心のつながりをひしひしと感じました。

そのほかプライベートにおいても、日台同名駅キャンペーン駅長ツアー、原住民集落を巡る大学生スタディツアー、上野公園で開催された台湾イベント、昨夏に興行された宝塚の台湾公演……とまさにどっぷり台湾漬けの日々でしたが、これらを通じて、日台がいかに親密であり、そしてそこには多くの人々の共感と協力が内在していることを、改めて実感させられました。

政治・外交的には複雑な関係にありながらも、今日にいたるまでこうして交流が絶えないのは、ひとえにたくさんの思いと支えがあるからこそ——そのことを経験として知ることのできた三年でした。

日本と台湾の関係は今後ますます進化・深化していくことでしょう。またそうあって欲しいと願っています。そして交流協会をはじめ、日台の架け橋となる人々の活躍によってこの友情が末永く続くよう、心から応援し続けたいと思います。



絵 宮崎菜津子